私が家政婦さん雇ったら男の娘が来た

嘯風弄月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事から帰りクタクタな私。　玄関を開ければあの子が笑顔で「おかえり」と言ってくれる。　茶髪のポニーテールに人形のようにクリクリ、ぱっちりした目に全体的に小さな身体。　猫の絵がプリントされたエプロンに右手にはおたま。　そんな家政婦さんが私をお出迎えしてくれる。〝彼〟が私に向ける笑顔はどんな花にも負けない可愛らしさ。　そう、〝彼〟である。

速報、　私が雇った家政婦さんは男の娘でした。

目次

家政婦雇ったら男の娘が来た ―― 1
隙を生じぬ二段構え ―― 13
富とか名誉や翼より、世界に１つだけのあの子のパンツをください 前編 ―― 23
富とか名誉や翼より、世界に１つだけのあの子のパンツをください 後編 ―― 31
さあ早く！その風邪を私に移すんだ！あ、もちろん熱烈なチッスでね！ ―― 40
蛇足か蛇足じゃないかは貴方次第 ―― 49
あれは何だ!?鳥か!?飛行機か!?もちろん…余ｄ「新キャラだよ」 52
孤独なグルメ ―― 59
アツゥイ!! ―― 66
夕焼 ―― 72
季節感を感じさせない秋のお話１ ―― 79

家政婦雇ったら男の娘が来た

事の始まりはいつだっただろうか。慣れない社会人生活に荒れ、食生活は歪み、毎日お酒におつまみ。部屋には散乱したビール缶や酒瓶、数日前に着た服や下着。貴重な休日は家で惰眠を貪り、起きればテレビやゲームをする1日。

ある日返ってきた健康診断の結果、私はそれを見て絶望した。体重が明らかに増えていたのだ。体重計など家の腐海に遠い昔に沈んだ……た、確かに少し脇腹とか背中とか摘めるかなって…　しかし私はまだピチピチのレディなのだ。この結果を受け止めるわけにはいかない！

私は決意を固めた。この自堕落な生活に終止符を打つと。しかし人間、そう上手くいかないものである。手をつけるべきことが多すぎたのだ。掃除洗濯料理その他諸々。1つこなせば他のことが蔑ろになる。そして毎日こなせるとは限らない。仕事の疲れからか羽毛布団にぶつかりスヤァしてしまう日々。私は早々に折れた。

それから数日、私は運命と出会ったのだ。いつも通り朝起きて、新聞などを取りに行く。新聞を開いた時1つの広告が落ちてきた。

『家政婦さん雇いませんか?』

と、その時私に電流が走る。まさに神から与えられた天啓のように、私はすぐさま行動に移した。広告の電話番号に電話をし家政婦さんを雇ったのだ。幸いお金には余裕がある。それなりの大企業に勤め、休日が少ないし、趣味に費やすことも無いので、お金は貯まりやすい。家政婦さんに家のことを頼めば、私は自分のことに集中すればいい。

なぜこんな簡単なことに気づかなかったのか、小1時間過去の己に問い詰めたい。この時ばかりは広告に感謝した。あ、他の広告は要らないです。青汁なんて飲む歳じゃないんだオラァ！誰がババアじゃ！

なんてふざけていたのが一昨日。そして今日ついに家政婦さんが来るのだ。私が（家政婦さんの力で）生まれ変わる日。自堕落な生活に力を借りて終止符を打つ記念日だ。

ソワソワしながら待つ、時刻は午前9時。本日は休日なり。何とか有給取ったぜシャア！

そして9時半、インターホンが鳴る。ドタドタと大きな足音を鳴らし私は走って扉に向かい開ける。扉を開ければそこには

――天使がいた

社会人生活で死んでしまった私の目に生気が戻ってきた。

私の身長は１６５ｃｍだ。女子にしてはそれなりに大きい。目の前にいるこの子は大きく見積もっても１５０ぐらいだろう。間違いなくそれより小さい気がする。首を下に向けなければ話が出来ない。

その子の容姿は茶髪のロングで目はぱっちりとしており睫毛も長い。正直かなり可愛い。私にそっちの気はない。大丈夫、私はノーマルな性癖を持っている。

「あの～…」

「喋った…」

素っ頓狂な反応をしてしまう私、失礼にもほどがある。

「?」

ええい!首を傾げるな、あざといぞ!可愛い。

「あーっとすいません、少しぼーっとしてしまいました。貴女が家政婦さんですか?」

「はい、そうですよ!僕は立花奏（たちばなかなで）といいます!」

僕っ子…だと…!ハイレベルな容姿に加え僕っ子だと…!

「あの…ご主人様のお名前の方を…」

ご、ご主人様…あ、いけない。鼻から…鼻から熱いパトスが…

「は、いけません!鼻血が出てますよ!」

そう言い彼女は必死につま先立ちになりテッシュで私の鼻血を拭う。彼女の可愛らしい顔が私の瞳一杯に映る。あ、これが母性ってやつね…急激に自身の顔が熱くなる。そして彼女の薄い胸板を求めるように倒れ気絶する私であった。

ーーーーーー

ーーー

ー

目が覚める。ここはテンプレの

「知ってる天井だわ…」

残念ながら知っている天井、汚れに汚れた自室の天井だ。はは、あれは夢だったのか。いい夢を見れたぜ…　もう一度寝ようと思い布団をかけ寝返りをうつ。干したてのお日様の香りとふわふわの羽毛が体を包む。ん～心地よい、煩わしいはずの蝉の声が子守唄に聴こえるほど意識は深く沈む。あれだけお酒の臭いと下着まみれの布団がこんな風に…

ん？ん？ん？　意識が急激に浮上する。私の布団は本来こんな清潔なものではないはず…　言ってはいけないがこんな快適なものではなかった。なぜ？そう思い身体を起こす。

そこにはいい意味で変わり果てた自室があった。遠い過去に腐海に呑み込まれた化粧品や体温計などはきっちりと整理され机の上に載っている。うちから失踪したと思っていた携帯の充電器などはしっかりとバンドでまとめられ箱の中に入っている。

どういうことだ…　様々な考えが頭を行き交う。私が知らぬ間に片付けたや果てには私の今までの社会人生活は嘘だった、などという意味不明な考えまで色々と出た。最終的にある結論に至った。考えられることはただ1つ、先ほどの彼女は…

自室の部屋が開けられ見覚えのある人物が現れた。そう私が雇った家政婦さんだ。髪は邪魔にならないようポニーテールにされており猫の絵がプリントされたエプロンを着ている。

「あ、よかった。起きたんですね」

「え、ぁ、はい」

「あはは、今日は暑いですからね。体調崩す方も多いですし。突然ご主人様が倒れられてびっくりしましたよ」

「あーすいません」

なるほど、熱中症だったのか。あれは決して母性を感じたからではない。うん、違うからね！

「はい、麦茶です！麦茶には身体を冷やす効果がありますからね、暑い夏にはぴったりですよ」

手渡された麦茶を一気に飲み干す。そういえばよくお母さんも夏は麦茶を用意してくれたなぁ… 遠い夏の記憶に思いを馳せる。と、と、お礼言わなきゃ。

「お母さん… ありがとう」

「ふぇ?」

あ?お?あれ、待て落ち着け私。お母さんなんて私が呼ぶから彼女も変な声を出してしまったじゃないか。あざといぞ、もっとやれ。違う!弁解だ!弁解をしなければ!

「い、いやこれはあれです!昔よく母が夏に麦茶を出してくれたので!そのことを思い出してお母さんと…」

何をバカ正直に言っているんだ私は…

「くすくす、そういうことでしたか。僕の母もよく麦茶を出してくれました。だから個人的に夏は麦茶を飲むイメージがあるんですよね。ふふ、気に入っていただけたのなら良かったです」

穢れない笑みを浮かべる彼女。天然記念物、いや絶滅危惧種だ。しっかり保護してあげないと。なんてバカなことを考えたが、汚部屋に住む女が何を言っているんだと急激に冷める。むしろ彼女が穢れてしまう。

「あの～すいません…　お部屋、勝手に掃除してしまいました」

そうだ、今の私の部屋は決して汚部屋では無いのだ。

「いえ、大丈夫ですよ。むしろとってもありがたいです」

「ほっ、よかったぁ…」

胸に手を当てて良かったなんていう人、職場のぶりっ子以外見たことないわ…　いかんでしょ（私の理性）

「流石に驚きましたけどね…　あれだけの部屋が起きた瞬間綺麗になってましたから」

「ふふ、とってもお仕事のしがいがありましたよ！」

こらこら、薄い胸を張りなさるな。私が滾るでしょう。どこかの賢者が貧乳は胸を張れと言っていたがこういうことか…　世の真理を知ったよ。

「部屋を換気してお布団を干して洗濯物をまとめて洗濯して、とにかく色々ありました！」

「あはは…　すいません」

「いえいえ、全く仕事がないよりあった方がいいですから。それで…そ、その…」

顔をうつむかせて人差し指を胸の前でチョンチョンし始める彼女。

「どうかしましたか?」

「その…し、下着の方も…洗わせて…いただき…ました…　勝手にすいません…」

ほほーう、愛やつよのぅ。下着なんぞに照れおって。しかも同性の。だが、

「よい、許す」

何を言っているんだ。私はいつの王族だ。

「…!は、ははー寛大な処置、ありがとうございます」

ものすごく申し訳ない。こんな変なノリに乗ってくれるなんて思わんかった。

「それで、先ほどは聞けなかったのですがご主人様のお名前を教えていただきたいのですが…」

「はっ、すいません…　私の名前は山奈彩音（やまなあやね）です」

「山奈彩音さんですね。素敵なお名前です」

「あはは、それほどでも」

褒められてまんざらでもない私がここにいる。名前を褒められるなんて今までなかったなぁ…　っと、私のことはどうでもいいんだ。それよりも

「雇用契約とかしないといけませんね」

「そうですね。リビングの方も片付けて起きましたしここは彩音さんのプライベートの部屋ですから、そちらで話をしましょうか」

ご主人呼びも名前呼びもどちらも良い、ディモールトだ

私の部屋からリビングへ移り話し合うこと数分、契約内容が決まった。

「それじゃあ基本的毎日でお願いします」

「はい、かしこまりました」

なんともアバウトな契約である。いや、皆待ってほしい。こんな可愛らしい子が毎日掃除洗濯料理なんかをしてくれるんだ、ここで契約内容を欲張らないでどうする。この契約を即決しないやつは間違いなく欲がない人間だ。普通なら出会って1秒で契約する。むしろ街中で見かけたら私と契約して家政婦になってよと言うまである。はい、事案ですね。

「自分でこんな契約結んでおきながらあれですけど毎日って大変じゃないですか?うち来るのとか」

「あはは、問題ありませんよ。徒歩1分でこの部屋に着きますから」

「え?」

「ふふふ、実は僕もこのマンションの住んでるんですよ。ここの三階です」

「え、えぇぇぇぇ!」

悪戯の成功を喜ぶ子供のようにウィンクしながら言う彼女に私の心はときめく。いかんでしょ(私の理性)

ちなみに私の部屋は1階だ。階段を降りる手間がなくて楽だからね、仕方ない。

「あ、もうこんな時間ですか」

私が気絶してから時計は見ていないがかなり時間が経ってしまったようだ。短い針が7を指している。

「それではそろそろ僕は帰りますね。お夕飯は冷蔵庫の中に入っています。明日の朝やお昼の分も。しっかり温めてから食べてくださいね」

む、このままでは彼女が帰ってしまう。もう少し眺めていたいんじゃや。どうすれば… どうすれば彼女を止められる… 閃いた!(通報しないで)

「あ、シャワー浴びていきません?家事を全て任せて私は何ももてなしを出来ていないので流石に申し訳なくて。今日は暑かったですしせめて汗を流していってくださいよ」

「ん、んー　そう…ですね。お言葉に甘えさせてもらいます！」

　彼女は少し汗の匂いがした。汗をかきながら頑張って家事をしてくれたから当然である。しかし不思議なことに汗臭さがない。わかりやすく言うなら…　そう、青春の香りだろう。テニスなどに打ち込む美少女が汗をかいても臭いとは思わないでしょう。甘酸っぱい匂いが彼女からするのだ。むしろいい匂いでしょう。匂いソムリエになれそうよ。

　彼女に風呂場を案内して私はお茶の用意をする。麦茶よりアイスティーにしておこう。少しでもオシャレアピールをして若者感を出す。（今更）彼女の好みはわからない、一応白い粉（砂糖）をサーッと入れておく。

　数分後、頬をほんのりと赤らめた彼女がリビングに戻ってきた。

「ありがとうございます。いいお湯でした」

「それは良かったです。お茶請けがなくて申し訳ないですが、アイスティーです」

「あ、ありがとうございます」

　アイスティーを両手で持ちちまちまと飲んでいく彼女。今こうして向き合い立っているわけだが本当に小さい。しかも薄着過ぎる。無防備が過ぎるぞ。それになんかこう違和感が…

　じーっと眺めること数秒。私の視界に桜色のぽっちが見えた。恐ろしく小さい桜色、私でなきゃ見逃しちゃうね。じゃなくて…まさか…　彼女は…

「か、奏さん!なんでブラつけてないんですか!」

「?」

「なに?って顔しないでください!ブラジャーですよ!ブラジャー!」

「え?」

「え?」

「あの、僕、男…ですよ…?」

「え?」

「え?」

「あの、失礼ですが身分証などは?」

「あ、はい、どうぞ」

「はい、どうも」

渡された保険証に視線を走らせる

「え、20歳?え、男」

「え?」

「あ、あぁ… あぁぁ!」

今までの行動に納得がいった。胸が全く無いのも、下着で恥ずかしがっていたのも、僕という一人称も。

「？」

（朗報）田舎のおとっつぁん、おかっつぁん。雇った家政婦が男の娘でした。

隙を生じぬ二段構え

ピピピと耳障りな電子音が部屋に響く。時刻は朝7時、起きて会社に行く準備をしなければいけない時間だ。曲がりなりにも私は乙女だ、準備にはしっかりと時間をかける。普段ならば。私の勘が囁くのだ。もう少し寝るべきだと、ラッキーイベントが起きるから。そう告げている。

布団を顔まで被り、狸寝入りをする。するとコンコンと部屋の扉が叩かれた。

『起きてますか…？　入りますよ』

その声の直後ドアが開かれた。布団を被ることは継続する、しかし僅かに隙間を開け外の様子を探る。

誰かが部屋に入りドアを閉める。その瞬間私の眼は衝撃の物体を捉えた。肌白くぷるんと丸い桃だ。そしてその桃に繋がるように伸びたスラリと細い脚。裸とはまた違う人の情欲を煽る扇情的な格好、裸エプロンをしたあの子の姿。

(うほぉ…　プリケツダァ…　これは…なかなかの安産型…)

そう考えた私を誰が責めるのだ。いや、責めるものなど誰もいない。仮に責めるものがいるとしよう、私はその評価をしっかり受け止める。あの子のこの姿を拝むためのコラテラルダメージというものだ。

あの子は私の布団に近づき、顔を息が感じられるほどの距離まで私の顔に近づける。

「起きて…ますか？起きてください」

吐息多めの小さな声で私の耳に囁く。耳にかかる吐息がくすぐったい。しかし決して悪い気分などではない。むしろ最高の気分だ。かかる息が私を包む、そう！つまり私は、今！あの子の胎内にいるのだよ！　…やめよう、ぅん。…うん、ね、ほら、深夜テンションで変なことを口走るなんてなくあることでしょう。え、朝？寝ぼけてるんでしょう、私は。

「むぅ…　起きませんね」

お、っとぉ。風向きが変わってきた。くるか？くるんか？あの定番のあれが？出ちゃう？いいよ、こいよ、耳にかけて耳に。

「起きないと…キス、しちゃいますよ？」

おほ～～、頂きました！ここで起きるやつは間違いなくアホ。王子が眠り姫にやった優しいキスより、もっと激しい情熱的なのをお願いします！

寝ているフリをしているので寝相で顔を出しキスしやすい体勢を整える。さあ、バッチコーイ、カモーン！

徐々に近づいてくる顔。互いの息が感じられるほど近くなる。そして今、私の唇に

――――――

――――

―

ピピピと耳障りな電子音が部屋に響く。時刻は朝7時、起きて会社に行く準備をしなければいけない時間だ。

……フフ、フハハ、フハハハハハ！チクショーメ！

クソ…　目覚まし撲滅委員会を設立してやる。絶対に許さんぞ、目覚ましども…　じわじわとなぶり殺しにしてやる…　ああ、そうとも。最後まで夢を見ることが出来なかったよ！あと1秒でも長く見れれば、昨日少しでも早く眠ればよかった…　はあ、今更遅いか。ぬ？

突然コンコンと部屋の扉が叩かれた。

『起きてますか…？開けますよ』

ふ、夢の私は残念だったな。やはり最後に勝利するのは現実の私のようだ。さて、布団と一体化するとしよう。勝者である私には女神からのチッスが待っているからなぁ！ハァーハッハッハ！

「起きて…ますか？　起きてください」

ウホホーイ、来た！見た！勝った！ここまできたら私の勝利は確定的に明らか。そう、この台詞の後に続く言葉は1つ！真実はいつも1つなのだ！

「起きないと…　朝ご飯抜きにしちゃいますよ」

そうそう、朝ご飯抜きね。

「………おはようございます」

「はい、おはようございます。目覚ましさんに重労働をさせたらいけませんよ」

そうか、目覚まし時計も休みのない社畜だったのか…

「はい… すみませんでした、目覚ましさん」

「はい、よく出来ました! 朝ご飯出来てますよ、まずは顔を洗ってきてくださいね」

残念ながら現実の私も勝てなかったよ… 胃袋を掴まれているからね、仕方ない。のっそりと布団から出て洗面所に行き急いで顔を洗う。洗面所に行く途中とても香ばしい香りがしたからだ。先ほどまで静かだった私のお腹もこの匂いを嗅ぎ、ぐーぐーと急激に騒ぎ始めた。

顔を洗い終え、リビングに向かう。テーブルの上にはシンプルな、ザ・日本食という感じの料理が載っている。

鮮やかなピンク色に皮は程よく焼けている脂の乗った鮭の切り身、ある程度離れていても鼻が匂いを捉える芳醇な出汁の香りがする味噌汁、深い緑色を帯びたほうれん草のおひたし、一粒一粒がしっかりと存在を主張しているご飯。そうそう、こういうのを私は求めていたのだよ。素早く席に着き手を合わせる。

「いただきます」

「たーんとお食べ!」

まずは味噌汁を一口啜る。味は濃すぎず薄すぎず、程よいバランスで味噌と出汁の風味を感じる。わかめはそんな汁と絡み合い、豆腐は崩れ私の舌を包む。

ああ、パーフェクトだ。紛うことなき黄金比。奏さんは私の母になってくれるかもしれない人だ。

え?きもいって?すまぬ…　ん?そうじゃない?この前のあれはどうなったかって?特に何もなかったよ。ほんとだよ。ワタシウソツカナイ。

ーーーーー

ーーー

ー

「え?男…だったんですか?」

「え?男…ですよ」

「え?」

「え?」

「え?」

「え?もしかして…女…だと思ってました?」

「え?あーその、はい…」

「そう…ですか。あ、あはは、初めて会う方にはよく間違えられるんですよね。けど、雇用契約の時に性別は書いたから大丈夫かなって…」

「え?嘘でしょッ!?」

急いで契約書を取り出し確認する。なんだ女と書いてあるじゃないか…なんて都合のいいことはなく、ここだけ何故か男と太く濃い文字で強調して書いてある。

「あ、あはは…」

目に見えて落ち込んでいる…　いや、待ってほしい。そんなに可愛らしい貴方がいけないのだ。顔や体型はもうどうしようもない。しかしその髪型とエプロン、その絶滅危惧種のような性格。今時見かけない清楚な女子の様な貴方が悪い。だからとりあえず…

「す、すいませんでしたぁぁ!!」

謝る、この手に限る。誰かがこの場を助けてくれるわけでもなく、美人な私は新たなアイデアを出すわけでもなく、現実は非情である。謝る、この一手しかないのだ。

「いえ、大丈夫ですよ。もう慣れっこですから、ね?」

「いや、本当に申し訳ないです」

落ち込んでいた雰囲気が多少和らいだ。

「ええ、大丈夫です。それでどうしますか?」

「どうするとは?」

「このまま契約するかです。彩音さんは僕が男と知らないで契約したわけですし…　男が家事するのは嫌かなと」

いいえ、貴方は男の娘です。とは言わない、言えない、とても言いたい。

「契約は続行でお願いします。毎日来てください！私に毎日味噌汁を作ってくださぁぁい！」

「あ、はい」

――――――

――――

――

以上である。何もないでしょ。こうして今私は奏さんの味噌汁を啜っているわけさ。告白紛いのセリフ？何もなかった、いいね？

おっと、ご飯が冷めてしまう。早く食べてしまおう。おまいらは大人しく私が食べているのを眺めているんだな。おひたしに箸を伸ばす。

ふと顔を上げれば、奏さんが手を組み顎をその上に乗せニコニコとこちらを見ている。

「んぐ…　どうかしましたか？」

「あ、いや、その…美味しそうにたくさん食べてくださるのが嬉しく

て」

頬を若干赤らめて言う奏さんの笑顔は本物だろう。

「こんなに美味しいご飯ですからね、たくさん食べますよ」

「あ…　ありがとう…ございます…」

後半に行くにつれて徐々に小さくなる声。少しだけだった頬の赤さはラズベリーのように真っ赤になっていた。

お？褒められ慣れてないんか？グェヘハハ、おいたんがもっと褒めてあげるからねぇ…　やめよう、気持ち悪いから…　私がね。

バカなことを考えるのはやめて食べることを続けよう。鮭に箸を入れる。初めはふわりと箸を受け止めたが徐々に身が裂け、簡単に切り分けることが出来た。一口大に切り分けた鮭を口に放り込む。こちらは逆に少し塩分が強めだ。塩分が少しヒリリと舌を刺激する。

普通に食べるなら大変だろう。しかし、これは相方がいて輝く存在。和食には必須のあいつがこの場にはいるのだ。そう、穢れを知らぬ純白の田舎美少女、白米である。一口口の中に入れゆっくりと、何度も咀嚼をする。美少女が流す涙は如何なる宝石にも出せぬ輝きがある。白米が出すこの輝きの雫は私の口内を、鼻腔を、聖母のように甘く、そして優しく包み込む。

穢れを知らぬ純白だからこそ出すことのできる甘さだ。そしてここにこのピンク色の鮭の切り身を乗せ、口に入れる。

清純だったあの田舎美少女が色を知る年になった。先ほどまでにはなったこの塩味が、白米の甘さをある意味で引き立てる。色を知

り、恋を知り、性を知る。自身の価値に気づいた少女はその価値を武器に小悪魔めいていった。男を欺くようにあざとく、しかし聖母のように優しく、そして娼婦のように淫靡に。

あの頃の彼女は帰ってくることはない。しかし彼女は私という存在に尽くし続ける。私を満たすために姿を変え何度も舌を刺激し続ける。その奉仕が、とても良い。

はっ!?私はいったい何を…　何を考えていたのだろう。気がつけば鮭の身は亡くなっていた。最後まで私を満たすために最後まで奉仕を頑張ってくれたのだ…　感謝ッ!圧倒的感謝ッ!

最後に残った皮を食べる。パリパリと良い音を立てる。皮についた焦げ目は少々苦いがその苦味が良いのだ。人生は苦悩だらけだ。苦いものは避け甘さだけが欲しい。しかし苦味があるからこそより甘さが引き立つのだ。僅か一口分のお米を一気に口の中に放り込む。これ以上の幸福は私にはないな…

ああ…　今ならもう…　死んでもいい。それほどの朝食であった…　最後に感謝を伝えるため手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「はーい、お粗末さまです!ふふふこんなに綺麗に食べてくださると、僕も作り甲斐があります」

「ええ…本当に最高の食事でした…　これからも末永くよろしくお願いします…」

私にここまで言わせるとはとても恐ろしい奏さんの料理。しばらく余韻に浸るとしよう。

「ところで会社に行かなくて大丈夫ですか?・」

時刻は8時。普段なら用意がほとんど終わる時間である。

「あ、ぁぁぁぁ!!!!」

膝から崩れ落ちそうになるのを何とか地を踏みしめ耐える。そして足を素早く動かし用意に移るのであった。

家政婦さんはとても料理上手でした。

富とか名誉や翼より、世界に1つだけのあの子のパンツをください　前編

季節は夏真っ盛り。本来ならば私達社会人を焼き尽くすべく、輝き続ける太陽が自己主張をする季節だ。

しかし今は違う。時刻は午前5時半。鬱陶しいほどの自己主張はなりを潜め、世界を照らすための光を放出するだけの存在と化している。

顔から落ちてゆく雫がアスファルトの地面を湿らせ、色を変えてゆく。ハァハァと吐かれる吐息は熱と湿り気を帯び、どこか淫猥さを感じる。ところで私が何をしているのか。文学的な表現に挑戦してみたがむづかしい…　いとむづかし…

まあ、要するにランニング（ダイエット）です。家のことは家政婦さんに任せた、なら私がすることはこれしかない。学生時代のような、あの頃の完璧なスタイルを取り戻すべく私は努力を続ける。なお始めたのは3日前の模様。

今の体型を言葉で表すなら…　ボン!ボッ!ボン!だろう。間違いなく男性受けする体型だ。しかし私は女子なのだ。女子同士のコミュニティだってある。同性からの厳しい審査を通過するため、痩せねばならぬ。それにお腹つまめるって嫌だからね。乳と尻は通す、贅肉は通さない。その誓いを胸に運動をしている。

ランニング以外にも体幹や柔軟、無駄な肉を別の部位に移すためのマッサージなんかしている。なおこちらも3日前からだ。

太陽は煩わしい、しかし汗をかかねば痩せることはない。本当はこ

んな時期に家から出たくない。帰って冷えた部屋でアイスとお菓子をつまみながらゲームをしたいのだ。あの時私は自堕落を辞めると決めたのだ。やる時はやる人間と証明してやる。そして男の視線を釘付け…にはしたくはない。まあ、奏さんが釘付けになるのはちょっと嬉しいけど。

あれ？私の方が奏さんに釘付けになってない？いや、気のせいだ、絶対だ。痩せて無駄肉を乳と尻に全て移しボボン！キュッ！ボボン！な体型にしてやる！待ってろよモデルスタイル！俺は絶対、成功してやるぜぇぇ!!!光る風を追い越すほどの速さで走り始める私だった。

朝方で涼しいとはいえ、それは昼と比べた場合だ。気づけば汗がダラダラと流れている。服を絞ればバケツを満たせるのでは？そう思うほど汗を流し、家に帰った。

――――――

―――

―

急いでお風呂場に向かい服を脱ぎ浴槽に浸かる。予め沸かしておいたのだ。朝風呂は気持ちがいいよね。不快な汗も全て流れて気持ちはとてもさっぱりとしたものになった。シャワーだとあまり満足出来ないんだよね。だからシャワーよりお風呂が一番。

少しだけ温まり浴槽から出て頭と身体を洗う。髪は痛めないように優しく、身体は中心から遠いところからマッサージするように洗ってゆく。鏡に映る自身の身体が目に入った。じーっと眺めて見る。心なしか痩せた気がする。ほんの少しだけくびれたかもしれない。

うん、これダイエット特有の錯覚だわ。
今度は鏡の前でグラビアアイドルのように谷間を強調するようなポージングをする。おお！これはイケてる！私はやはりナイスバデーの美人なのだ！

ーー虚しくなってきたのでやめよう…

お風呂場を出て濡れた身体を拭う。肌を傷つけないように優しく拭う。私が洗濯をしていた時はタオルはこんなにふわふわではなかったというのに… 奏さんには感謝しかない。
そういえばリビングはクーラーを点けていなかったな。身体にタオルを巻きクーラーを点けに行く。

「あ、彩音さん！おはようござ… ふぇ！」

おっと、いっけね。もうこんな時間か。顔を真っ赤にして起動停止した奏さん。

「きゃ…」

「ん？きゃ？」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

耳に刺さるような甲高い叫び。待て、待ってくれ。普通逆だろう。私が叫ぶ側で貴方が叫ばれる側でしょうに。こんな所で女子力の差を見つけられるとは思わなんだ…

ーーーーーー
ーーーー
ー

あの叫びから数分後無事奏さんは戻り私は服を着た。

「彩音さん!分かっているんですか!貴方のような素敵な女性がそんな格好をしていたら大変な目に会うんですよ!男は皆ケダモノなんですよ!」

「ウィッス…」

さりげなく褒めてくださった。嬉しいなぁ。

貴方もケダモノなんですか」とはさすがに聞けない。

「なっ…!そりゃ僕だって男ですからそういうのに興味が…って何を聞いてるんですか!」

「あれ?もしかして口に出てました?」

「それはもうがっつりと…」

「あちゃーすみません」

「すみませんじゃないですよ!全く… 僕ってそんなに男に見えませんか?」

そのセリフを涙目の上目遣いで言われても正直困るのである。

「あ、いや、この前まで一人暮らしでしたからついその癖が…　決して奏さんが男に見えないわけではないです」

嘘です、正直男には思えません。裸にひん剥かなきゃ正直信じられません。

――奏さんの奏さんを見ても男とは信じられない気がしてきました。

とりあえず私にひん剥かせてください。何円だ？何円出せば剥かせてくれるんや。ブェヒヒ！金ならいくらでも出す、だからひん剥かせてくれ！

最低だなこれ…

「そう…ですか。次からはちゃんと気をつけてくださいね…」

「はい。すいません」

「ふぅ…　ご飯、食べますか？」

「はい！」

「ふふ、わかりました。今温めますね」

ややや苦笑い気味の笑顔だが今日の笑顔も素敵だ。私の朝はこの笑顔を見ることで始まる気がする。

ーーーーー
ーーー
ー

朝食は美味しくいただきました。今日は食パンにベーコンエッグ、野菜のスープだった。シンプルながらとても満足のいく食事でしたよ。

掃除機と洗濯機のデュエットが家に響く。奏さんはお仕事中だ。こんなに暑い中ほんとよくやれるなぁ…　あ、ちなみに私は今日はお仕事休みです。

お、洗濯が終わったようだ。掃除機の音も止まり奏さんのパタパタとスリッパを擦る音だけが聞こえる。そういえば普段仕事で居ないから掃除と洗濯をしているところを見たことがないなぁ。うん、いい機会だちょっと見てみよう。

バレないようにこっそりと覗く。今は洗濯機から洗濯物をカゴに移しているようだ。水を吸った布ってかなり重いよね。意外なことにそれを苦にしていないようだ奏さんは。あんなにちっこいのにどこから力が出ているのだろうか。

この前試しに腕相撲した時は私の圧勝だったというのに。あ、私はゴリラじゃないよ。確かに女子にしては力はあるけど断じてゴリラではない。スポーツが盛んな学校とかだとゴリラ多いよね。スポーツは得意だけどゴリラじゃないよ、ほんとだよ。

おっと、奏さんが移動するみたいだ。身を隠しベランダを見る。うん、ごめんね。踏み台ないと洗濯物干せないよね…　いつ用意したのかわからないが踏み台を設置し、一つ一つ丁寧にしわを伸ばし干して

いく。
ふむ…　しかし、こう、なんというか…　無防備な後ろ姿っていいね。髪の毛が結ばれていることで丸見えなうなじに、干そうと必死になるため揺れるお尻。うむ、たまらんのぅ…

すけべ親父のような思考をしながら眺めること数分、突如奏さんの顔が赤くなる。手に握られていたものは無論下着である。見ないために何もない方向を見て干そうとするもしっかり見なければ身長的に届かない。ほんの数秒だけ下着に視線を向け素早く干す。しかしその後視線を激しく動かした。奏さんが来てそれなりに時間は経っているがまだ慣れていないようだ。

いや、そもそも私が洗濯をすればいいんだけどね。普通男にやらせるのはあり得ないからね。ただ奏さんなら大丈夫でしょう。男にはとても見れないというのと、信用出来る人間だからだ。かのじ…　失礼、彼はとても誠実な対応をいつもしてくれる。私の信用を得るのはとても早かった。どの人からも信用され愛されるタイプだと思う、彼女は。失礼、彼でした。

しっかし何食べてどんな教育したらあんな純真な可愛い子が出来るのだろうか、人類の神秘である。親御さんの顔が見てみたい。そのまま娘さんを私にくださいとか言ってみたいね。うん、息子さんだね。

洗濯も終わったのだろう、満足そうに頷いている。バレないように自室にそーっと戻っていく私だった。

「彩音さーん」

「はーい」

「僕買い物行って来ますね、何か食べたいものなどはありますか?」

「んーそうですね…」

なんだか無性にケバブが食べたい。だがこれは厳しいだろう。さすがに自重する。

「豚の丸焼きで」

「ふふふ、もう…スーパーに丸々一頭売ってるわけ無いじゃないですか」

適当なボケだが思いの外琴線に触れたらしい。この人って結構笑いのツボが浅い気がする。気を遣って笑ってたとかだったら軽く死ねるけどね。

「肉じゃがとか刺身が食べたいです」

「りょーかいです!それじゃあ行ってきますね」

正直誘拐されないか心配だが、まあ大丈夫…だよね?ストーキングなどしたら事案になるのは間違いないのでついて行きたくなる気持ちをグッと堪え見送る。

富とか名誉や翼より、世界に1つだけのあの子のパンツをください　後編

さてと…　そろそろ届くかな。私が家にいる理由のもう一つとしては今日、実家から色々届くからだ。母曰く思い出の品を詰めたとのこと。

ちょうどインターホンの音が鳴る。さて、思い出の品とはいったい何なのだろうか。そういえば少し外が暗いな。雨が降るという予報もあったし奏さんが心配だ。けどあの人はしっかりしてるし多分傘など持って行っているだろう。…傘よりも合羽の方が似合っていると考えた私は悪くない。

――――――
――――
―

それなりに大きいダンボールが届いた。さて早速ご開帳ということで…　中身の方はなんじゃらほい。テープを切り蓋を開け梱包材を投げ捨てる。こういうことしてるから私の部屋は汚くなるのだ。あとでしっかり片付けよう。それよりも中身だ。

「お、これは…　懐かしいなぁ」

中に入っていたのは私のアルバムなんかだ。幼稚園から高校までしっかりとある。こんな私にも可愛い時期はあったんだぞ。今？今は可愛いより美人だから。さすがにアルバムを奏さんに見られるのは恥ずかしいな。部屋へ行き本棚に隠す。まあすぐばれそうだけど

あの人は勝手に漁るような人ではない大丈夫だろう。再びダンボールの中を探る。

「んお?これは…」

箱から出てきたのはピンク色の小さなワンピースだった。これは私が小さかった頃に着ていた特にお気に入りの1着だ。悲しいかな、私のその時の成長はとても早く、着れなくなるのもすぐだった。

あの頃はどんな時でもお姫様気分だったなぁ… 今じゃお姫様などではなく馬車の御者ポジションどころか馬ポジションである。社会人なんてそんなものよ…

っていかんいかん。感傷に浸るのは後だ、ワンピースを軽く畳みそこいらに放り投げる。うん、部屋が汚くなるね。まあこれも後でやるとして。

「お、これは… ぶふっ!」

箱から出てきたのは予想外のものに吹き出してしまった。

「な、なんでこんなものまで…」

私が子ども時代に履いていたパンツだ。お尻の方に猫の顔がプリントされている。いや、ほんとうにいつの頃のだよ。そもそもなんであるんだよ。我が実家はいったいどうなっているのか娘でありながら全く把握していなかった。

まあ両親どちらも変人だしな、仕方ない。私は唯一の常識人だからね。え?嘘をつくな?何を言う、私ほど常識的な人間はいないよ。今までの変態行為はなんだって?あれは愛だよ。仮に私が変態だとい

うのなら私は変態という名の淑女だよ。あれは淑女の嗜みなんだよ。可愛いものを愛でて何が悪い！君たちは奏さんを見たことがないからそう言えるのだ。全く、最近の若人ときたら…そうやって人をすぐに変人扱いする。

私はいったい誰に文句を言っているのだろうか…？病院行こう、疲れてるのだ私は。おい、誰だ今精神科行けって言ったのは。私は至って正常だぞ、ほんとだからな。

こんなことしてる場合じゃねぇ！奏さんが帰って来る前に早く片さなければ。見られたらしたら悶絶死するぞ、絹ごし豆腐より柔らかく、離乳食より硬い私のメンタルが灰燼に帰す。

箱を漁れば出るわ出るわ。卒業証書や学校のテスト、まだこの辺はいいだろう。しかし蝉の抜け殻にお弁当のバラン、私にゴミを送るんじゃあない！初めてのお弁当とか初めてとった蝉の抜け殻の写真ならわかる。なぜ現物があるんだ！おかしいだろぉ！どこにしまってたんだ！

しかも昔大切にしていたヨーヨーやゲームなんかも出てくる。失くしたと思ったらあんたらが持とったんかい！夜ショックで泣いたんだぞ！布団に籠って泣いてたんだぞ、この時失くしたと思って！くそぅ…　悔しいのぅ…

それらを手に取った時ひらりと一枚の写真が落ちる。写真の裏には文字が書いてあった。

『失くしたと思って泣いてる彩音♪』

キレた。私は紛うことなくキレた。かの邪智暴虐な両親を除かねばならぬとかそんなレベルじゃあない。その写真を絶対に負けられれ

ないメンコの勝負のように、あるいはペンを机に思いっきり投げた総統閣下のように、地に叩きつける。写真は地に着いた瞬間霧散した。

今ならゴリラと呼ばれても構わない。私はそれで両親を消せるなら一向に構わない。私の怒りに呼応するかのように、空からは滝のような雨が降り、雷がその音を町中に広げていく。とりあえず冷静に、洗濯物を取り込む。そして帰ってきた私は八つ当たりするかのように箱を思いっきりひっくり返す。すると箱から一冊のアルバムが出てきた。

『マイエンジェルの成長記録』

我が両親よ…　なんてタイトルをつけているのだ…　とりあえず1ページめくる。ただの私の成長記録だ、なんてことはない。ただ写真の一つ一つに両親が感想と喜びを綴っているだけ、それだけだ。コメントを書いていない写真はない。思うことは…　まあ、愛されていたということだけだ。ほんとうにそれだけだ。ただ先ほどの怒りはなくなってしまったよ。

って、あぁぁぁ!!箱をひっくり返したから部屋がすごい汚くなってしまった!か、奏さんに怒られる…　奏さんの雷が落ちないよう素早く片付けに移す私だった。あ、ついでにお風呂沸かしておこう。片付けで多少汚れるだろうし、奏さんも雨で身体が冷えているかもしれないし。

ーーーーー

ーーー

ー

「ふぇぇ…　ただいま帰りました」

「あ、おかえりなさい」

急いで帰ってきたのだろう。息が荒い。髪や服は濡れ身体にぴっちりと張り付いている。うむ、これもまたよし。おっとそうじゃない、タオル持ってこなきゃ。

「はい、これタオルです」

「すいません…　ありがとうございます」

奏さんはタオルでがしがしと頭を拭く…　ことはしない。髪を撫でるように、水をしっかりと吸い取るようにタオルで拭いてゆく。ふふ…　どうせ私は粗暴な女子ですすよ…　がしがしと頭を拭きますよ、ええ…

髪や身体は拭けた。しかし服が濡れている以上また身体も濡れてしまう。

「奏さん、お風呂沸かしといたんですよ。服は私が洗濯して乾かしておきますから入ってください。」

「あ、さすがに…　いえ、お世話になります」

「しっかり身体を温めてくださいね」

「すいません、ありがとうございます」

風邪など引かれては困る。生活的な意味でもあり目の保養的な意味でもある。まあ風邪を引いたなら私が甲斐甲斐しくお世話すれば

いいだけさ、ニュヒヒヒ…

待機すること数分、私は洗面所に突撃する。

「お湯の加減はどうですか？」

『ちょうどいいですよ～』

風呂場から聞こえる声はどこかへにゃっと脱力した声だ。気持ちいいのだろう。さてやるか。奏さんの脱いだ服に手をつける。シャツ、スボン、靴下、そして

――パンツ

な、何故だ！何故パンツがトランクスなんだ！パンティではないのか!?あ、男だったわ。いっけね、間違えちゃった。ふむ、それにしてもトランクスか。灰色の地味なトランクスが私の手には握られている。そこらの野郎のパンツなど微塵も興味ない。しかし奏さんのパンツだ。

――控えめに言って欲しい

しかしこれをそのまま持って行っても私が蔑まれた目で見られるだけだ。うむ、それもまたよろし。出来れば豚を見るような目でお願いします。そんなことした時点で私はお縄である。

ところで諸君、この世界の原理はなんだ。そう、等価交換だ。人とは古来から異なる物質を等価であるものと交換してきた。そして時代が進み石を金に変える研究が始まった、無論失敗で終わったが。そ

して現代の等価交換とは何か。サービスや物に対してお金を払うことだ。
　私には石からパンツを作る技術などない。錬丹術ならぬ錬パン術など持ち合わせていないのだ。お金を払おうとしよう、事案だ。紛うことなき事案だ。なら私が取るべき等価交換とは、古来からある物々交換だ。
　しかしどうしたものか、私が普段履いてるパンツなど奏さんが持っていたら奏さんが変な目で見られてしまう。あ、そうだ。あれがあるじゃないか。
「奏さん、代わりの洋服ここに置いておきますね」
『は～いありがとうございます～』
　ふふ、ほにゃっとしていて可愛らしい。この服ならぴったりだろう。私の物が奏さんの物と等価とはとても思えない。先ほどうちに届いた使用済みバランとスポーツカー並みに価値が違うだろう。しかし物は使いようだ。私の服が無ければ奏さんはタオル１枚で過ごすことになる。私は奏さんのおパンツ様が手に入る。うむ、ウィンウィンの関係じゃないか。よし、等価だな（錯乱）
――――――
――――
―
「おや、奏さん？どうかしましたか、扉で身体を隠して」

「ど、どうかしましたか…じゃないですよ…　な、なんで…　僕の代わりの服…　これなんですか…」

「ふむ、何かおかしかったですかねぇ?どんな服を置いたのか忘れてしまいましたよ。見せてくれません?」

「だ、ダメです!こんな姿…見せられ…ません…」

「ふむ、仕方ないですね。私がそちらに行きますよ」

「ダメです!絶対に!」

「はっはっはっ!そんなに嫌がらなくてもいいじゃないですか」

「こ、来ないで…」

「ほーう。よくお似合いですよ、その服装。控えめに言って最高です」

　ワンピースのスカートの裾を摘みながらこちらを睨む奏さん。私が幼少に着ていたこの服がここまで似合うとは、私よりも似合っている。ん?騒がないのかって?ふっ、冗談はよしてください。私は淑女なのですよ。速い者にしか至ることのできない賢者の境地に達しているのです。この方のような可愛らしい子の前で格好の悪いところは見せられませんわ。

「すいません…　奏さん。私が持っている服はどれも大きいですし女物です。唯一着れそうな服がそれしかなかったんですよ。私も男物があれば提供はしていました。しかし悲しいことに無いのです。２２年間彼氏無しの女には無用な物です。許してくださいこの私を」

「あ、う、そう…ですよね…　彩音さんも決して悪意があるわけじゃな

いですもんね… それに僕がお風呂を借りた訳ですし文句を言うのは失礼ですよね…」

なんかすまん、ほんとすまん。ここまで優しいとは思わなんだ。しゃがみ目線を奏さんと合わせる。

「いえ大丈夫です。しかし一つだけ、もし良心が痛むのならお願いしてもいいでしょうか」

「は、はい。僕にできることなら何でも！」

「それでは失礼します」

奏さんの後ろに回りあれを行う。男子小学生奥義！
吹き荒べ青春の風（スカートめくり）。

（ふっ… いい、臀部だ…）

黒猫が一瞬で赤く染まり私の視界もシャットアウトしていった。
最期に聴こえたのは天使の声だったなぁ…

「えっ… 彩…さん!? …さん!?」

さあ早く！その風邪を私に移すんだ！あ、もちろん熱烈なチッスでね！

カチカチと時計が時を刻む音が部屋に満ちる。針が指し示す時刻は9時。普段ならば何らかの生活音が響いてるはずの時間だというのに時計以外の音が一切ない。

家に誰もいないのか？

――否、家主の女性がいる。

彼女は時計をチラチラと見る。その顔には待ち人来ず、戸惑いと悲しみの表情が浮かんでいた。

さらに時が進み15分後、ようやくインターホンが鳴る。彼女は飼い主の帰りを待っていた犬のように、尻尾があれば間違いなく千切れるほど振っているだろう、喜色満面といった表情をしている。

玄関へと素早く行き鍵を開けドアも開ける。

「おはようございます」

挨拶は大事、古事記にもそう書いてある。いつもならすぐ挨拶が返ってくるだろう。しかし挨拶が帰ってこない。目の前にいるあの子の表情は前髪で顔が隠れているため見ることができない。いつもならすぐ返ってくるのに、挨拶を返されないことが少し悲しい、いや結構悲しい彼女であった。

私は…何か失礼なことをしてしまったのだろうか…　原因は自分なのではないかと思う。思い返せば……

ーーセクハラしかしてねぇわ。

言うまでもなくギルティ。これである。

社会的な死よりもこの子に嫌われるのは恐ろしい。土下座をするためにしゃがみこむ。その時ようやく気づいた。家政婦さんの様子がおかしいと。

ため息のような憂や呆れを含んだものではなく、発情した猫が鳴き続ける時のような熱のこもった艶のある息を吐き続けている。

「はぁ…はぁ…」

覗き込んだ顔は赤い。それどころか耳まで真っ赤だ。視線はあっちこっちと向いており定まらない。目尻には涙を溜めている。

「もう…だめぇ…」

そう言い家政婦さんは私を押し倒そうと倒れ込んでくる。身長と体重の差は最も分かりやすい力の差だ。身長体重共に勝っている私が倒されるわけもなく、家政婦さんが私に抱きつくような形になって終わった。

「いただき…」

とうとう私の魅力にやられてしまったのね！ふふ仕方ない子ね。というわけで据え膳食わぬは変態の恥、それでは…

「けほっ…　けほけほっ…」

ふむ、ははーん…　なるほどなるほど。これは…

風邪ですな。

悲報　発情期ではなく風邪でした。

ーーーーー

ーーー

ー

家政婦さんを部屋のベッドに運び込む。原因はこの前の雨だろうか？かなりの土砂降りだったし…　それにしてもすごい熱だったなぁ。大丈夫だろうか、心配だ。

とりあえず今の私に出来ることは飲み水の用意と冷却シートぐらいだろう。お洒落なタンブラーなんか家にはないし…　ペットボトルに水を入れておくとしよう。女子力が低い？うるせぇ！そんなもん水筒やペットボトルでいいんだよ！

冷却シートは冷蔵庫に入れてたはず。うん、ちゃんとあるね。ほら見ろ！女子力だぞ！冷蔵庫から瞬時に冷却シートが出るんだぞ！それにこんな美人が甲斐甲斐しく世話するんだぞ！嬉しいだろぉ！

看病装備一式を持って自室へと向かう。先ほどの二つに加えタオルと風呂桶も用意した。扉をそっと開け奏さんを起こさないようゆっくりとベットに近づく。

奏さんはかなり辛そうだ。明らかに息が荒くなっている。シートを袋から出し奏さんのおでこにピタリと貼り付ける。しかし冷却シートがすぐにぬるくなりそうなほど熱いな。

「んんっ…　ふぇ…　彩音さん？」

「あ、すいません。起こしてしまいましたか？」

「あれ…？僕は…どうしてここに…」

今までの経緯を掻い摘んで説明する。私に倒れ込んできたというのは伏せて。

「うっ…　ご迷惑をおかけしました…」

「いえ、普段私の方が迷惑をかけてます」

家事的な意味とセクハラ的な意味で。いつもお世話になってます。

「それはだって…　僕のお仕事ですし…」

家事だけの意味だと思ってらっしゃる。まあこの言葉の裏の意味に気づかれたら私は死ねる。

「とりあえず今日は休んでください。そうですねぇ…　風邪が治ったらとびっきり美味しいご飯を作ってくださいな」

「！…わかりました。彩音さんが口や目から光が出るようなご飯を作りますよ！」

それはいったいどこの味皇だ。それにしても意外である。奏さんからそんなネタが出てくるとは。見かけによらずアニメやマンガは見ているのかもしれない。まぁ私と同類であったとしても私のこの趣味を明かすことはないだろう。我ながら歪んだ性癖である。あ、もちろん皆にも内緒だよ。言うわけないじゃない、乙女の秘密を探ったらやーよ。はぁと。誰が何と言おうと私は乙女です。２０超えて男との付き合いが一切ない純真無垢な乙女です。な？そうだろ？な？乙女だろ？

「お水ここに置いときますね。何かあったら携帯か何かで呼んでください。私はお昼ご飯作ってきますから、奏さんはしっかり寝ててくださいね！」

「はーい……」

奏さんが布団を被るのを見届けた後キッチンに移動する。風邪か……私が風邪の時はよく母が卵粥を作ってくれたな。奏さんの為に作るとするかな。ついでに私もお粥にするとしよう。その方が楽だし。

昨日の残りのご飯を冷蔵庫から出しお粥を作る。出来たお粥に白だしと卵を入れ塩をかけて完成だ。万能ネギを上に添えておこう。

……お粥だけって寂しいなぁ。冷蔵庫を漁って見ればパックに包まれたゼリーが出てくる。ヤクブーツキメたねという薬を飲みやすくするためのゼリーだ。些か、いやかなり名称に問題がある名前だろう。確か忙しい時にゼリーを買おうしたら間違えてこれを買ったんだよね。パッケージをまともに見なかった私がアホだったよ…今思えば店員さんが怪訝な表情してたしね。

ゼリーを皿に移す。薬は種類を一応たくさん持っていくとしよう。

市販とは言え自分が使っている薬を他人に使わせるのはあまり良くないが、薬無しですぐに良くならないだろうし少しでも症状を和らげてほしいのだ。

さてと、それじゃあまた行きますかね。

――――――

―――

―

「奏さん、お粥と薬持ってきました。食べられそうですか?」

「はい、ありがとうございます」

奏さんはなんとか身体を起こしこちらを見る。

「いい匂いですね…」

「お粥にダシを入れましたからね。ただのお粥だと味気ないですし卵粥にしました」

くきゅるる~と気の抜けた音がする。奏さんのお腹の音だ。

「う… あは、はは。僕、病気の時もしっかり食べる人間なんですよね。だからいい匂いを嗅ぐとお腹が…」

熱のせいで赤い顔をより赤くしてそう言う奏さん。なるほど、食いしん坊男の娘、ありだな。

「ふふふ、そうなんですね。それじゃあしっかり食べてください」

スプーンでお粥を掬い息を吹きかけ冷ます。病人にやるべき事はただ一つ、あーんに決まってるだろぉ!!

「はい、あーん」

スプーンを奏さんの方に持っていくと奏さんは目をまん丸にしてから慌てだした。

「あ、あのですね、僕は確かに体調が悪いですけど…」

「あーん」

「スプーンも持たないほど弱ってるわけでは…」

「あーん」

「じ、自分で食べれますよぉ…」

「あーん」

「うぅ… ふぁい」

「ふふ、はいあーん」

奏さんは押しに弱い。多分必死に頼み込めばやらせてくれる。嘘です、押しには弱いけど線引きなんかはしっかりしてるので頼んでも無駄です。残念、誠に残念である。

お粥を目を細めながら美味しそうに食べてくれる奏さん。しかし

なんというか…こう、小鳥に餌を与える親鳥の気持ちというか、ぅん、すんごいかわいい。

「ふふ、懐かしい味です。僕の母はよく病気の時に卵粥を作ってくれました」

「おや、そうなんですか？ 私の母もそうなんですよ」

奏さんのお母さんはよく卵粥を作ってくれたらしい。私が奏さんのお母さんだ！（唐突）いやーそれにしても共通点があるって嬉しいよね。

気がつけばお粥は綺麗になくなっていた。

「あっ…」

お粥のなくなったお茶碗を見て残念そうな声を出す奏さん。控えめに言ってかわいい。ふふ、けど大丈夫！ まだゼリーがあるのだ。

「おぉ…！」

ゼリーを出せば沈んでいた表情が一気に明るくなる。かわいい。

「奏さん、この中で使ってる薬はありますか？」

「あ、僕はこの会社の薬をよく買いますね」

奏さんが選んだのはヴェレーノ社の風邪薬である。私も体調崩した時はこの会社の薬をよく使う。何というかすごいよく効く薬なのだ。不思議なくらいね。ふふ、また共通点を見つけてしまった。意外と私達は似ているのかもしれない。

「それじゃあこの薬を飲んでまた寝てくださいね」
「はい、絶対にすぐに治して美味しいご飯を作ります！」
　私はまた奏さんが布団を被るのを確認してからリビングに戻っていった。寝ている奏さんにキス？そんなことはしない。そんなやつは淑女の風上にもおけない。

――――――
―――
―

　気がつけば街は夕焼けに染まっている。今日の奏さんはしおらしいというか、感情が制御出来ていないというか、借りてきた猫のような感じがとても可愛かった。カナデニウムの補充は済んだな！これであと1週間は戦える！

　翌日、奏さんは完治し私に料理を振舞ってくれた。その日、光を発しながら町内を走る人影がいたと噂されたことから私に何があったかはいう必要はないだろう。

蛇足か蛇足じゃないかは貴方次第

今目の前で無防備な寝顔を晒している人が僕のご主人様、山奈彩音さんです。今までのご主人様、光さんや咲ちゃんとは違う意味でとても変わったご主人様です。

僕は男なのに彩音さんはいっつも無防備です…　初めて会った時、僕は女性に間違えられてしまいました…　いつもそうなんですよねぇ…　そんなに男性には見えないのでしょうか…僕は。確かに髪は長いから紛らわしいかもしれないですけど、そんなに女性に見えるんでしょうか。お父さんはお母さんに似ていると言っていましたし…　ならば仕方ないです…　とうとう披露する時がきたみたいですね！

えい!!どうですか！この上腕二頭筋は！

え?腕を曲げれば誰だって筋肉が盛り上がる?言わないでください…　本人が1番分かってますから…

あ、話が脱線しすぎましたね。彩音さんは変な人ですが優しい人なんですよ。見た目はとてもクールな印象ですが性格はとても明るい人で優しいんです。この前僕が雨で濡れた時はお風呂を貸してそれに服まで貸してくださいました。彩音さんと僕じゃ身長差があるからあの服じゃないと着れなかった訳ですけど…　身長…分けて欲しいです…

恥ずかしかったですけど僕の事を想っての行動ですからね、文句は言えませんよ！

翌日僕が風邪を引いた時ベットを貸して看病までしてくださいました。スプーンを持つのも辛かったので食べさせてくださったのはとてもありがたかったです。やっぱり恥ずかしいですけど…

彩音さんはお気遣いの達人です！僕の行動を先読みするかのように何かをしてくださります。初めての会話の時に僕が話しやすいように彩音さん自身や家族について話したり。あ、そうです！そういえば彩音さんの家の味と僕の家の味は結構似ているんですよね。彩音さんの卵粥を食べた時、お母さんを思い出しました。僕にはもうお母さんがいないから余計懐かしくなってしまいました…

それにしても僕は家政婦失格ですね…助けるはずの彩音さんに助けられてばかりです…　光さん達の時も失敗ばかりでした…

…うん！しんみりしてちゃダメですね！過去ばかり振り返ってたらジメジメした人間になるって怒られちゃいます！彩音さんやお父さんの為に頑張らないと！

彩音さんの話に戻りますね。彩音さんはとっても面白い方なんですよ。時々ボソッとダジャレを言うんですけどそれがとっても面白いんです！動物特集の番組を観てる時ネコが出てきたんですよ！ネコですよ！そしたら彩音さんが静かに「猫が…　猫が寝転んだ…」って……ふ、ふふ、うふふふ！ダメです!!ふふ…ふふふ、今聞いても笑っちゃいます。す、少し待ってくださいね…

ふぅ…　落ち着きました。こんな風によくダジャレを言うんです。

実は密かに楽しみにしてます。時々パソコンを使ってる時やし（香具師）？とかき、きぼんぬ？とか。あとは絶対許さないどんさうざんど？とかこれも乾巧のせいだ？とか知らない言葉や知らない方が出てきます。彩音さんは博識なんですね。けど人のせいにしてはいけませんよ！世話焼きおばさんみたいですが、ダメなものはダメなんです！

　しっかりお話しないといけませんね。

　変わった方ですが決して悪い人ではないんです。だから話し合えば分かり合えるはずです。確か彩音さん曰くこういうのはローマ字でＯＨＡＮＡＳＨＩと言うそうです。何故でしょうか？グローバル対応？けど話し合うことは大事ですからね。僕はしっかりと彩音さんとＯＨＡＮＡＳＨＩします。

　あれ、もうこんな時間ですね。そろそろ彩音さんの家に行かないと。ふふ、今日も元気にお仕事の時間です。それじゃあ行ってきます！

あれは何だ⁉鳥か⁉飛行機か⁉もちろん…余d「新キャラだよ」

「それじゃぁ奏さん、行ってきますね」

「はい、行ってらっしゃい！」

気分はまるで新婚さん。笑顔で手を振って見送ってくれる人がいるって…素晴らしいことだね！漫画なんかじゃよく気になるあの子の声援でパワーアップなんてあるけどその通りだね！今ならレベル1縛りでダ〇ソがクリア出来そうだよ！もしくは某ストラテジーゲーの難易度天帝がクリア出来そうだ！

ほぉーら、どんどん男の娘パワーが溜まってきたぞ！さて、遅れる前にさっさと会社に行って仕事を終わらせますか！ファファファ、今日のお昼は何だろうなァー‼奏さんの愛妻…愛夫弁当の中身は何だろうなァーーー‼

「あれ？これって…彩音さーーん！待ってーーー！……行っちゃった、届けなくちゃ…」

ーーーーーー

ーーー

ー

身体中から力が抜け、とうとう立つ気力も無くなった。枯れた枝のようにポッキリと私の脚は折れ曲がる。視線を前に向ければ日系ブラジル人の鼓ボビン君が、三段の重箱弁当をいつものように持ってきて物凄い勢いで食べている。

彼は何故いつも重箱なのか、彼の家系事情と胃袋はどうなっているのか謎である。歴戦の傭兵のような面構えをしているが、何と驚きの新社会人。今年入社してきたばかりの18歳である。

社長曰く、『鼓ボビン…ね。君にミドルネームを付けるならK…かな。何故かって?鼓、ボビンときたらケーブルドラムだろ!!なははは!!!君面白いから採用だ!』とのこと。

とても失礼な社長である。それにケーブルドラムはKではなくCだ。こんなことばかりしている社長だが、このよくわからない企業をよくわからないもののシェア率世界1位でよくわからないうちに大企業にした凄腕である。この会社自体も社長自身も本当によくわからない。この前なんか家庭科で使う銀色のおっさんを大量に開発してたり、刺身の上にタンポポを全自動で載せる機械を作ったり、需要があるのか怪しいものまで。

ちなみにボビン君は超有能である。新人達の中では1番初めに昇給するだろう。2メートル近い彼が縮こまって小さいキーボードを叩いているのは意外とシュールで面白い。

いや、ボビン君や社長の話は今はどうでもいいんだよ!私は今人生の岐路に立たされている。いつだって世の中はそうだ。我々に厳しい選択を強いる。絶望の淵に立たされるどころか突き落とされるこ

となんてしょっちゅうだ。少しでも慢心した瞬間神々はいつも突き放す（圧倒的責任転居）

まさかこの私がコンビニ飯を買わなければいけないのか？私のジャンキーな舌は受け入れるだろう。しかし心が虚しい。私の為に献立を考え私の健康の為に1グラム単位で健康を考えられたあの愛妻弁当を食べずにコンビニ飯に浮気しろとな。

否！そんなことなどあってはいけないのだ！コンビニ飯？私の舌は許そう、だが矜持が許すかな！

そうは言ったもののどうしたものか…　時間はあるけれどとても家に行ってここに帰ってくるだけの時間ではない。ここは奏さんに連絡すべき…か？そう思い携帯を握りしめるが連絡するのを止める。迷惑をかける訳にはいかないのだ…（今更）　空腹で午後仕事するのはとっても辛いのだ…　あーあやっちゃったね彩音さん。１人脳内で小芝居をしていたら一件メールが来ていたことに気づく。

こ、これは…?!

［彩音さんお弁当をお家に置いて行ってしまったみたいなので届けに行きますね。お昼頃には到着します］

神！女神!!奏!!世界が産んだ地上の女神や…　そしてこのあり方はまさしく新婚夫婦ではないか！世界が私たちの結婚を祝福してく

れている!!

さあ行くとしようっ!!愛しのマイハニーの元へ!!!

ーーーーーー

ーーー

ー

圧倒的エントランス!人が受付以外いないぜ!!少し早く着いてしまったのかな?まあ例のアレをやるチャンスだし良しとする。

『ハァ…ハァ… すいません、お待たせしました彩音さん』

『いいや、今来たところさ。マイハニー』

そう、これである。隙あらばイケメンムーブを決めていくスタイル。効果、相手は落ちる。さあ、私の心の準備は出来た!いつでも来るといい!

…ん?声が聞こえる?

「あ、光さん!お久しぶりです!」

「奏くんか、久しぶりだね」

知らないメスの臭いがする…　なんてふざけてる場合じゃねぇ！奏さんが笑顔で話しかけてるぅぅ!!まずい、まずいよ！ＮＴＲはまずいってば!!

あの人は確か…社長の娘の斎宮院（さいぐういん）光（ひかる）さんでは?あの毎年社内のイケメンランキング１位の斎宮院光さんでは?貴公子なんて呼ばれてる斎宮院光さんなのではないのか?

いったい…　いったい奏さんとどういう関係が…

「奏くん、またうちに戻って来ないか?」

「あ〜…」

「華が寂しがっているんだ。それに…」

「キャッ…」

「ボクも寂しいんだ…　君がいなくなってね…」

あぁ〜壁ドンの音〜!!からの顎クイ!!だからＮＴＲはダメですよ！数ある性癖の中でもＮＴＲはまずいですよ!!やばい、目覚める目覚める!!

というか奏さんの反応…　女の子みたいな声出しやがって!!頬を赤く染めんじゃないよ!!

「その…　気持ちは嬉しいですけど…　僕は今違う方のところで働い

ているので…」

「へぇ…　それは誰だい？」

「それは…　あっ！彩音さん！」

ぬぉぉぉ…　今気づくのか、今気付いちゃうのか奏さん…　見ろよ相手側の目、生ゴミにたかるハエぐらいにしか見えてないでしょう。

「はい、お弁当です！今度は忘れちゃダメですよ！」

「あ、あはは…　ありがとうございます…」

「へぇ…　なるほど、君がね…」

「はい！今のご主人様です！」

「えーっと、山奈あ…」

「山奈彩音さん…だったね。君の活躍は聞いているよ。これからも会社の為頑張ってほしい。どうやらお邪魔なのはこちらみたいだからね、大人しく退散するさ」

「あ、はーい」

「奏くんのこと頼んだよ…」

耳元でボソリと囁く光さん。その声には謎の威圧感があった。俺の女に手を出すな的な声であろう。…だが私は負けない。負けるわけにはいかないのだ。

というか主人公が負けるなんてありえないでしょう常識的に考えて。

思わぬところで現れたライバル、それもかなり奏さんと親しそうな人間だ。これから私と奏さんの恋愛はどうなってしまうのか、次回『彩音、死す』お楽しみに。

孤独なグルメ

おろ?これは…

ある日田舎のパパ上、ママ上から届いた箱。どうせいつも通り大したものは入っていないとバカにしつつ呆れながら箱を開く。中身は珍しく実用性に溢れたもの…いやほんとにどうした!!

田舎から大量の食肉が贈られた件について。

あの有名なブランド牛に豚、しゃもなんかもあるな…　一体どういう風の吹きまわしなのだろうか…　お、手紙が入ってる。

『おい…　肉食わねぇか…』

経緯を書けよ!!紙の無駄使いにも程があるだろ!!なんで1文だけなんだよ!しかもパイ食わねぇかみたいなノリにすな!!普通1人娘の心配をするだろぉ!!

まあ…有り難く頂くとしましょう…　しかしある意味丁度良いかな。今日は奏さんは用事があるから夜居ないし…　最近頑張ってるし…　たまにはご褒美ってことで良いよね…?

思い立ったら吉日、早速行動に移すとしよう。スーパーまで走って行くとしますか。

――――

――――

醤油にたっぷりのおろしにんにく、砂糖に七味唐辛子、味醂とおろし生姜を混ぜ合わせる。小皿にはレモン汁を注ぐ。薬味には葱やわさび、ごまなど。手元には塩と胡椒。そしてラップ。

机にホットプレートを用意し丼いっぱいの白飯。

凍るのではないかと言うほどキンキンに冷やしておいたビールをジョッキに注ぐ。

さあ…用意は整ったぜ…

予めタレに漬けておいたカルビをよく温まったプレートに丁寧に置いていく。

肉達がジュージューと音を奏でる。表面を鮮紅色から茶色に姿を変える。私に刺激を与えるのは視覚、聴覚だけではない。最も過激、まさに食の暴力と言うべき感覚、嗅覚だ。

ただ焼くだけでも香ばしい匂いを充満させる肉。しかしそこに醤油とにんにくの濃い香りが入り混じる。気がつけば私の口の中は琵琶湖のように大量の涎で満たされている。

まだ紅色が少し残っているぐらい、食べ頃だ！丹精込めて育てたお肉。悠久の時を耐え、五感への暴力に耐え…　そして今、これから私の口へと納められる。

「いただきます…」

食前のあいさつ、明日への糧となる全てに感謝を。

1枚、焼き上がった肉を箸で掴む。その震えは私の武者震いか、それとも肉がその柔らかさを主張するために震えているのか、私にはわからない。

わかることはただ一つ、ただ目の前の肉を喰らうことのみ。

眼前に広がる褐色のユートピア。それは五感だけでなく胃袋をも刺激する。激しくなるこの攻撃に私は耐え切れるのだろうか…

口を大きく開け一気に肉を口内に押し込む。ふわり、などとはとても呼べない。暴風だ、口内を荒しまわる香りの暴風だ。

タレと肉が織りなす至高の化学反応。溢れ出る肉汁はただの肉汁ではない。にんにく醤油のタレが混じり肉汁に更なる味わいを与える。

噛むこと数回、肉はまるで幻だったかのように溶け私の喉奥へと飲み込まれていった。

悠久の時を耐えたというのにその食事は刹那、あまりにも短すぎる。だがこれだけで終わりではない。まだまだ、私が手塩にかけて育てた肉たちはいるのだ。

あとはもう、飢えたライオンのように喰らい尽くす。1切れ掴み咀嚼、口に肉が残っている間に白飯を頬が破裂するのではないかというほど頬張り、そして嚥下。私の食事を妨げるものは何もなく、真っ直ぐ胃袋へと納められた。

心が渇きを感じる頃合い。肉を掴み再び喰らう。そして私を忘れるなと主張するこの黄金色に輝く液体、ビールを一気に呑み流し込む。黄金の濁流は私の渇ききった喉にどんどん吸収されていく。ゴクリ、ゴクリと音を大きく立てながら呑み込まれていく。

あぁ、この喉越しだ。白飯とこのビールがあって焼肉は更に力強さを増す。

もうお上品に1枚1枚など食べない。何枚も纏めていただくとしよう…

厚みも数も増えれば旨味も香りも倍になる。強烈なパンチにくらりとする。それは肉側からしたらカルビはただのジャブだったらしい。

サーロインやハラミ、ホルモンなど、ストレートからフックなどあの手のこの手で私を倒そうと手を変えてくる。挑戦者は牛だけではない。鳥や豚、名セカンド達の薬味や調味料。私が倒れるのは時間の問題であった。

身体が火照っていく。その時の私はこう形容するのが正しいだろう、人間火力発電機と。

タンやホルモンの食感を楽しみ、あっさりとしたレモン汁で脂を中和したり。私はすぐ肉の虜になった。だが悲しいことにもう終わりの時らしい。

胃袋の限界が近い…　肉はまだあるというのに私自身が耐えられない辛さ。敗北宣言だ。仕方ないので翌日奏さんにお裾分けするとしよう。きっと奏さんならより美味しく調理してくれるはずだ。

僅かに残した胃袋の隙間。これからそれを完全に埋める。ラップ

を丁度いい大きさに切り、御釜にあるご飯を包みおにぎりにする。そして肉の旨味を吸ったこのタレをご飯に塗りたくりプレートに置く。

そう、シメは焼きおにぎりだ。程よく焼き目が付いてきたら更にタレを塗り込みまた焼く。再び耐えるのみ。食事とは忍耐である。このおにぎりの味、食感、香りを想像し常に己の食欲を高める。

そろそろ頃合いだろう。

プレートから引き上げ熱々のおにぎりにかぶりつく。外側はやや硬く、中はもっちり。浴びるほどかけた影響か、中までタレが染み込んでいる。一口噛んだ瞬間鼻腔を駆け抜ける焦がし醤油。理想のシメ方だ。

あれだけ空いていたお腹は十分すぎるほどに満たされている。漫画などだったらきっと醜くお腹を料理で膨らましげっぷをしているくらいに。動くのも苦しいくらいだ。

がっぷり大量に食べたのは間違いだったのか?否、そんなことはない。私はそれ以上に幸せなのだ。感謝せねばなるまい。

「ごちそうさまでした」

食後の感謝。さて片付けを始めるとしよう。消臭剤をぶちまけなければこの臭いは消えないだろうなぁ…　そしてこの大量に散らばっている空き缶。どうやって誤魔化すか…

――――――

―――

ー

「おはようござ…　焼肉臭いです…」

「いや〜…　実家から良いお肉が届いたので。これお裾分けです」

「あ、ありがとうございます。そういえば今日は缶などのゴミの日ですね。僕はゴミ捨て行きますけどゴミはありませんか?」

「え、あ、私が行きますよゴミ捨て。いつも大変な思いして奏さんは運んでるでしょうし今日ぐらいは私に」

「いえ、大丈夫ですすよ。ところで…」

あ、不味い気がする…　笑顔がだんだん黒く…

「昨日、何本呑みました?」

「え、え…えーっと…」

「いえ、言わなくて結構ですよ。少し待っていてください」

そう言い一度洗面所の方に行った奏さん。帰って来た時に持って来たものは体重計であった。

「もちろん嫌とは言わせません。さぁ乗ってください、ね?あ、もちろん僕は見ないのでご安心を」

拒否権はないようだ…恐る恐る片足を乗せもう片足も乗せていく。

「い、いやぁぁぁぁぁ!!!!」

その日から私は運動の量が増え野菜中心の生活になったとだけ言っておく。

アツウイ!!

あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ゛ち゛ぃ゛よ゛ぉ゛～゛…　今年の暑さは正直異常じゃない？なんかこれ毎年言ってる気がするなぁ。皆もそうじゃない？

こんなにも暑いからね、冷蔵庫に顔を突っ込んで身体を冷やしたいけど電気代で私が昇天しちゃうからやめようね。

とはいえどうしたものか…　いや、まずは水分補給だな…　こまめに摂取する、これが一番大事。けど水中毒には要注意だ！淑女なお姉さんとのお約束だゾ！

え？淑女は冒頭であんな声を出さない？

………冷蔵庫には残り物とかがあるけど整理されていて物は少ないなぁ。飲み物は麦茶と牛乳と…　これは？

ボールに入れられた薄黄色の液体。やや粘性のあるそれは私の記憶にある飲み物と見た目が一致した。

これは…　ミルクセーキではないか!?奏さんが気を利かせて作ってくれたんやなぁ…　しかもかなり濃厚ですよこれ。奏さんの濃厚ミルクセーキ（意味深）

こりゃ飲まなきゃ失礼ですな。うん、よく冷えている。コップに注ぎ一気に飲み干す。喉に絡みつくような濃厚さ。独特の舌触りと風味。なるほど…

バッター液だこれ!?

「にゃ…　にゃにゃってるんですかぁぁ!!早く吐いて!吐いてぇ!」

あ、奏さんだ。奏さん好き。オロロロ…

――――――

―――

―

「まったく…　幼児じゃないんですから何でも口にしないでください…」

奏さんの幼児になるならワンチャン。奏さんが幼児になるのもワンチャン。幼女ってやたらと世話を焼きたがるよね…　閃いた!

「むぅ…　また変なこと考えてますね…」

「HAHAHA!!反省してますよ!」

「はぁ…　わかりました。今日のご飯はぬ「NOOO!!それだけは勘弁を!」ちゃんと反省してくださいね…」

「もし貴女に何かあったら心配なんです…」

「うっ…　すいません…」

見よ、お前ら!これが愛のあるお説教だ!クソ上司のパワハラとは違う本物の愛だぞ!

「それにしても今日はどうかしましたか？何だか妙に張り切ってるというか…」

「ＨＡＨＡ！暑さにやられてしまって…」

　気丈に振る舞おうとするが床に這いつくばったまま動けない。夏ってなぁ…　辛いよなぁ…

「そ、そうですか…　今日は早めにご飯にしましょうか。冷たいものを食べれば少しは元気が出るかなーって」

「そうしましょう！今すぐ食べましょう！さあ！」

「ふふ…　本当に調子のいい人…　それじゃあすぐ用意しますね」

　そう言い台所へ行った奏さん。

　冷たいものか。やはりこの時期だとそうめんだろうか、あの極細麺はちゅるちゅると何杯でもいける。蕎麦なんかもいいなぁ、啜るように食べ喉越しと香りを楽しむ。うどんなんかもいい、コシのある麺とさっぱりとした出汁。

　どの麺類であったとしても薬味が大事だよねぇ…　山葵だったり茗荷だったり。

　そういえば私は今日バッター液を飲んだのだった（意味不明）天ぷらだろうなぁ…　蓮根やお芋、かしわなんかも良い。良い事尽くしだな。

　奏さんのチョイスは何だろうか…　期待しながら待つとしよう。こんな時はネットサーフィンだな。

お、男の娘の１８禁写真だと!?これは…ゴクリ…

あぁ!?腹筋スレだぁ!?に、２００回…

ーーーーー
ーーー
ー

私の貧弱過ぎる腹筋が痛み始める頃、台所から揚げ物の音が聴こえた。やはり天ぷらか。
ほう、冷やし天ぷら液ですか。大したものですね。冷やした天ぷら液はグルテンの発生を抑え衣をサクサクにしてくれるため天ぷらを扱うお店でもやる方法です。
なんてどうでもいい常識的な事を呟く。え?お前料理出来ないだろって?バカヤロウお前知識はあるんだよコノヤロウ。それって料理エアプ勢じゃないか?

…そうだよ（憤慨）

だってだってお弁当買った方がお手軽だしぃ～自炊しなくても現代では生きてける環境が整ってるしぃ～　なぁ!!!そうだろ!!!こ〇し君!!!!まったくその通りなのですぅ!!!!

私の中のイマジナリーハムスターもそう言ってる。これは至って普通のことなのだ。

毎度思ってることだが可愛い子が家に1人いるだけで空気が違うね！そして手料理ときた！こりゃ酒が進みます…けど制限されてるんだなこれ…　今日ぐらいは多分許してくれるだろうそうだろう。

それにしても奏さんは私服のセンスがかなり変わっている。ちゃんとした服を着ている時もあるけど変わったシャツを着ていることの方が最近は多い。

今日だってほら。ラッコバターとかいうラッコがバターを抱いているシャツだ。ホタテバターではない。ラッコバターなのだ。この前は爪とぎしてる猫のイラストに欠伸と鍵尻尾という文字が書かれているシャツだった。

いったいどこで買っているのだろうか…　よーく考えたら私は奏さんが可愛くて家事上手ということしか知らない…　これは…いけないな。仲良くなるにはもっと知る必要もある。恐らく光さんは私以上に奏さんを知っているだろう。

くっ…　リードされているのか、私が…　この私が…　必ずいつしか聞き出してリードして「出来ましたよ〜」

「はぁ〜い」

ご飯食べてからでもいいでしょうそうでしょう。

――――――

―――

ー

「今日はお蕎麦と天ぷらです！」

1束1束丁寧に纏められ盛られたお蕎麦。揚げたて故に湯気が上がっている天ぷら。小皿にネギや山葵が添えられている。

「今日も美味しそうです。いただきます」

「はいどーぞ！」

蕎麦を1束掴みお出汁に浸し一気に啜る。蕎麦は飲み物とよく言い喉越しを楽しむものだと。確かにこの喉越しは癖になりそうだ。

黄金色に輝く天ぷら。どれも美味しそうで一瞬迷い箸をしてしまいそうになったがレンコンを掴む。サクサクとした衣と歯ごたえのある身。私が天ぷら液を飲んだだけあって美味い（意味不明）

「蕎麦湯もありますからね。たくさん食べてください」

「わーい」

あまりの美味しさに先ほどまで考えていたことを忘れていることに気づかない。あとお酒のことも。果たして私はいつになったら奏さんの秘密を知ることが出来るのだろうか。

夕焼

「ん～……　ふぇ～…」

元気に音を鳴らす目覚ましを止める。寝ぼけ眼を擦りながらキッチンへ行きトースターにパンをセット、焼けるまでの間に顔を洗う。再びリビングに戻りフライパンにハムを2枚載せ卵を2つ焼く。お湯を沸かしコーヒーを1杯、砂糖は少し多めで。

かなりさっぱりとした朝食の完成だ。今日という日はあまり食べる気にならない。

「いただきます…」

機械的に手を動かし咀嚼する。時々コーヒーを飲む。うぅ…　まだ苦い…

「はぁ…」

いつもなら間違えないはずの甘さ、今日という日はどうにも感傷的になってしまう…

だって今日はお母さんの命日だから。

お父さんとお母さんは近所でも有名なおしどり夫婦で、特にお父さんがお母さんにべったりだったから僕は孤独を感じていた。けどお母さんはしっかりと僕の事を見ていてくれた。

どちらも大切な両親だけど、どちらかと言えばお母さんの方が好きだ。だから日に日に弱っていくお母さんを見るのはとても辛かった。

「…あっ、もうこんな時間」

食事を終えてから時計の長針が一回りしかけている。もう家を出なきゃ…

急いで準備を終え静かな玄関で挨拶をする。

「いってきます」

何も返ってこないのはやはり寂しい…

――――

――

―

目的地に向かう電車に乗りしばらく揺られていた。お母さんのお墓は近くに海が見える素敵な場所に建てたから、少し行くのに時間ががかってしまう。頻繁に行けないからお母さんに報告することがたくさんできちゃった…

最近のお父さんの事とか、新しい雇い主さんの事とか。そういえば彩音さんは大丈夫でしょうか… この前なんて掃除機のコードに引っかかって転んでましたし… ふふっ… とても面白い人だからお母さんもきっと喜んで聞いてくれるはず。

そういえば光さん、昔よりとても背が高くなってたなぁ…光さんの

お家でお仕事してた時は僕より少し大きいくらいだったけど、今は彩音さんより高くなってたし…　僕、女の子より背が低いのかぁ…　いや、でもよーく考えたら僕の周りの女性はとても背が高い気がする…かも?

やっぱり伸びないんだろうなぁ、僕の身長…　きっと華ちゃんも大きくなってるんだろうし…　ぐすん…　少しくらい男らしくても…『ダメです』!?

「今の誰!?」

「「ダメです」」

「どうかしましたか、光さん」

「そう言う彩音君こそ、急にどうしたんだい?」

「いえ…　ただなんとなく、こう言わなきゃいけない気が…」

「ハハッ!奇遇だね、僕もだよ。同じ家政婦さんを雇うように感性が似てるのかもしれないね」

「あはは…　そうかもしれませんね(あたい、負けへん!奏さんは絶対に譲らん!)」

「うぅ…」

謎の声に反応したからいろんな人に見られてる… 心なしか光さんのような？彩音さんのような？そんな声だった気が… まあいっか。次で降りるし… 決して恥ずかしいなんて思ってませんからね！僕は大人なので決して気にしてません！大人なので！

ーーーーー

ーーー

ー

駅を出た瞬間香る潮の匂い。今日はとてもいい天気だ。少し歩き墓地に着く。桶に水を溜めお母さんのお墓まで持っていく。

思ったより汚れてないな。お線香の灰やお墓の汚れ具合を見るに最近誰かが来たのかもしれない。誰かはわからないけどきっとお母さんも嬉しいはず。

「さてと… もっと綺麗にしちゃいますか！」

雑草や枝を集め周りを綺麗にし、お墓にお水を掛けブラシで汚れを落としていく。１人でやる作業はとても静かで波の音とブラシでこする音しかなかった。黙々とこなしていたらやっぱりすぐ終わる。早くお母さんにお話を聞かせてあげなくちゃ！

お線香を添え口を開く。

「まずはー…そう！新しい雇い主さんについて話すね！一番最初はやっぱり面白い話からだよね！」

時間を忘れただひたすらに語り続ける。だいたいの事はお母さんに報告出来た、話す事はもうないかと考えようとしてようやく空がオレンジ色に染まっていることに気づく。

「あとは…　あっ…　もうこんな時間かぁ…　早いなぁ…」

お母さんは当然この世にはいない。けどここに来るとまるでお母さんがいる気がして、寂しくなくなる。だからいつも話し込んでしまう。お母さんと僕の語らいを断つこの夕焼が少し苦手だ。けど帰らなきゃいけない。

「ふぅ…　お母さん、また来るね！」

最後に挨拶をして帰るためまた駅へと向かう。もう僕は、僕でいられない。

ーーーーーー

ーーーー

ー

「あ〜…　今日も疲れた…」

「あ、彩音さん。お疲れ様です！」

「あ、奏さん！」

「今日はお休みありがとうございました！明日からまたバリバリ働きますよー！」

「はい！頼りにしてます！」

「それではまた明日お会いしましょう！さようなら！」

「はーい！それじゃ！」

彩音さんコンビニ弁当持ってたなぁ…　少し悪いことをしてしまった気分…　明日からもっと気を遣ってご飯作らなきゃ！

「ふぅ…」

部屋の扉の前に着く。鍵を開けドアノブを握り少し躊躇う。

「……」

ドアを開けなきゃ…

「ああ！おかえりなさい〃澄音〃さん！新しい小説を思い浮かんだんだ！是非とも読んでほしいな！」

「ただいま戻りましたよ。あとで〃私〃が読みますよ、楽しみです」

僕は…私にならなきゃいけないんだ…

季節感を感じさせない秋のお話1

蒸されるような暑さも収まり、生茂る木々が紅く染まる時期になりました。いかがお過ごしでしょうか、田舎のお父様お母様。突然ですが私の家政婦さんがとても可愛いです。

え?いつも言ってる?それはもう勿論です。毎分毎秒、私の!この私の!家政婦さんの可愛さは変わります!故にその都度報告させていただきます。

それはこの間の事です。私の!ワタァ→クシ←の!→家政婦さんが買い出しに行った時の事でございます。

ーーーーーー
ーーーー
ー

奏さんの荷物持ちになるべくスーパーに同行した私。本人はそれほど買い出しする事も無いし、雇い主さんに荷物を持たせるわけには……と言ってはおりますが、どこの誰が奏さんを狙っているか心配なので私は同行致しました。

いつストーキングする?私も同行しよう。

彩音院!

なんてふざけたことを考えながら奏さんと話を楽しむ至福のひと時。スーパーに着く直前、何故か奏さんが止まったのだ。

「奏さん?どうしたんですか?」

「……」

どこかぽーっとしている奏さん。その視線の先には何と…

「焼き芋ですか」

元気に走り回るボビン君の姿が！　…ではなく焼き芋の屋台があったのだ。

「確かに焼き芋は美味しいですよねー…あの、奏さん？」

「…あ！その、焼き芋が大好きで…　えへへ、気になっちゃって…」

頬を赤く染め答える奏さん。肌が白いから余計目立つんだよね、慌ててマフラーで隠してるけど、モコモコで顔を隠すヒロインって凄い可愛いと思うの。

可愛い×頬染め×顔隠し×食いしん坊＝破壊力って、どこかの誰かが言ってたわ。はい、私です。

「もう秋ですしね。確かに焼き芋が美味しい時期です」

「そういえばまだ焼き芋食べてないなぁって…それでついつい…」

なるほどね、これは私の好感度を上げるチャンスだわ。ここでこう…

『ほら、奏さん。焼き芋、買っておいたから一緒に食べよう』

『彩音さん！素敵！』

甲斐性や漢らしさをアピールする絶好の機会！いや私は漢じゃ無いけど！漢女じゃ無いんですけどね！

乗るしかねぇこのビックチャンスに！さあ！何本でもおじちゃんが買ったるで！グゥエヒヒ！

「ごめんなさい！お買い物済ませないとですね」

「え、あ、そうですね…」

確かに食べ歩きとか店内じゃダメだもんね…　焼きたてが美味しいもんね…　熱々はすぐには食べられないもんね…　はい

さて、なんやかんやあったところで入店した私達。

「奏さん、今日は何を買うんですか？」

「そうですね、茄子が美味しい季節ですし麻婆茄子にしようかなと。あとはきのこ汁ですかね。食パンもお家に無かったので買うのと、ティッシュ、トイレットペーパーも買っておかないと。ちょうどどれも特売らしいので早く買わないとですね」

「なるほど！でしたら野菜はお任せください！」

ここで手早く商品を持ってくることでな…

『フッ…　奏さん、御所望の物はこれで全部かい？』

『彩音さんスマート！嫁がせて！』

ってなる寸法よ。いやー私イケメンすぎるわー、どこぞの会社のイケメンよりイケメンだわー！
今の私には情熱、思想、理念、性癖、愛、優雅さ、そして何よりも…速さが足りない！
私の性癖細胞がトップギアだ！ひとっ走り任せろよ！奏さんの為なら何だってしてやるぜ！アァァアクセルシンクロォォォ!!!
周りの主婦の誰よりも速い徒歩で売り場に向かった私であった。

―――――

―――

―

無事売り場に着いたが何だこの戦闘力は…　１０…　２０…　バカな！まだ増えるだと！なんて人の数だ…　もうダメだ…勝てるわけが無い…売り場からはたくさんの叫び声が聞こえる。
「それは私のよ！」「貰ったぁ！」「コノシュンカンヲマッテイタンダー」
「こいつは俺のもんだ！寄越せ！」「マモレナカッタ…」「ジュウエン！」
　これに飛び込めたいうのか…　果たして私は生きて帰れるだろうか…
　弱気になってどうする！私が勝ち取らなければ今日の夕飯が無くなるのだぞ！奏さんの、奏さんの好感度の為！いざ参らん！

「う、うぉぉぉぉぉ!!!」

無事買えたら私、奏さんに告白するんだ…

to be continue…